

イングリッシュラウンジ活動の有効性についてのパイロット研究

A Pilot Study of the Effectiveness of English Lounge Activities

佐々木 緑*

Midori SASAKI

抄 録

EFL 環境の中で英語を学ぶ学習者にとって、授業外での英語使用、学習の機会の確保は、英語運用能力の向上には不可欠であり、自ら学ぶ機会を求めようとする自律学習者としての姿勢こそが、英語学習の成功の秘訣である。多くの学校で、イングリッシュラウンジやクラブ活動などを通して、このような授業外での英語使用、学習を促進させようとする取り組みがなされている。しかしながら、そのような施設や機会を有効利用している学生は、学習意欲が高く、すでに一定の自律学習のスキルを身につけている学生が多い。一方で、学習習慣すら身につけていない学生が大学に入学している現状においては、単に機会を与えるだけでは不十分な状況でもある。本稿は、研究実施校である関西国際大学が 2009 年度より新設するイングリッシュラウンジでの自律学習促進活動について、一部のプログラムを試験運用し、利用状況の分析をもとにその効果と今後の課題まとめたものである。

1. はじめに

日本のように英語が日常の社会生活の中で使われない環境（EFL 環境）では、学習者達は授業以外で英語を使う機会はあまりなく、このことが英語コミュニケーション能力の養成において大きな障害となっている。文部科学省は「英語運用能力の養成」を重要視し、指導要領の改訂を重ねて来たが、今なお、日本の大学生の英語コミュニケーション能力は、アジアの諸外国と比較しても決して高いとは言えない状況である。このような状況を改善する一つの方策として、様々な学校が授業時間以外に学生たちが英語運用能力を鍛えることができる「イングリッシュラウンジ」のような場を提供するようになってきた。また、授業時間外での学習を促進しようと自主的学習を支援するセンターを設け、リスニング、リーディング、スピーキング、ライティング、語彙、TOEIC®/TOEFL®テスト対策などの自主学習教材の提供、教員などによる自主学習のサポートを実施する施設も増えてきた。しかしながら、これらのサービスは通常

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

一部の学習意欲の高い学生が利用するに過ぎず、英語力が低く自主学習への動機付けがまだ十分でない学生を取り込みながら、一定の効果を上げていくためには工夫が必要である。

自律学習 (Autonomous Learning) とは、学習者が「自分自身のために、自らの知識 (とスキル) を構築しようとして、仲間や教師やその他のリソースと協力し、交渉しつつ行う学習を、自分自身の手で管理すること」(青木, 1996)である。この意味においては、語学学習においてのみならず、すべての学びの源となるものであるが、特に外国語でのコミュニケーション能力を習得するという目標を持つ英語教育においては、教員が一方的に教え込むようむような教師主導型の学習ではなかなか効果が上がり難い。外国語の習得には個人差が大きく、各学生が自らの学習ニーズに気づきながら学びを進めていくことができるような学生主導型の学習法が不可欠である。学生を自律学習者に導いていくことが、コミュニケーション能力の養成の最重要課題であるといえる。しかしながら、学生の基礎学力の低下、および自主学習習慣の未定着が高等教育の現場でも大きな問題となっている現状では、単に授業外での「英会話」の機会を与えたり、自主学習教材を提供したりするだけでは、学生の学習意欲を向上させ、自律学習者へと導くことはできない。学習意欲を高め、能動的な自律学習者になれるように導いていく方法を見いだすことは大きな課題である。

自律学習は授業外での自習と誤解されていることも少なくない。しかし、自律学習とは学習者の内面からの主体性による能動的学習態度であり、これは授業内および授業外での学習の両方を支える柱となるものである。従って、自律学習の支援を考える場合、授業外の自主学習の支援だけを考えるだけでは不十分であり、授業カリキュラムと授業外学習を結びつけた支援を考えていかなければならない。1980年代後半に注目されはじめたコミュニカティブアプローチ(Krashen, 1988等)の教育理念の普及に伴い、それまでの日本の英語教育で伝統的に行われていた「文法・訳読」からの脱却が唱われ、コミュニケーション能力の養成が重要視されるようになった。コミュニカティブアプローチは、学生の自律学習および協働学習を基本とするものである。これに伴って、従来の教師主導型から学生主導型という新しい授業スタイルへ挑戦も始まった。しかし現状では、教育現場の教員達の間でも『学生主導型』という概念および有効性に対する理解にも違いがあり、従来の教師主導型からの脱却ができていない教員も多い。『学生主導型』を有効な形でカリキュラムに取り入れ、学生の自律学習を促し、成功へと導いていくには、同じ学生を教える教員が共通の達成目標に向かって、ペタゴジーを共有することも必要である。しかしながら、多くの非常勤講師に授業を任せているような大学では、教育目標やペタゴジーの共有は容易ではない。授業と連携する形でのイングリッシュラウンジ活動を実施することは、「自律学習を促進させる」というイングリッシュラウンジ活動の共通の理念の基に、各教員が自分の授業をその活動に結びつけられるように導いていくという点に於いて、「教育目標やペタゴジーの共有」にも貢献できると考えられる。

先述のような現状を踏まえ、本研究の実施校である関西国際大学でも2009年度より「イングリッシュラウンジ」を設け、英語の自律学習支援を実施することとなった。同校の教育学部

英語教育学科ではコミュニケーションアプローチの視点に立ち「学生主導型」の授業スタイルを導入し、非常勤講師とも年数回の連絡会を持ち、教育目標、ペタゴジーの共有に努めている。また **English Only Policy** を採用し、授業外でも英語のみの使用を義務づけることで、一定の英語使用の機会を確保しようとしている。しかしながら、十分な成果を上げるためには、これだけでは不十分であり、特に学習習慣が身につけていない学生、また学習意欲の高い学生への学習支援は十分であるとはいえない状況であった。このような状況を改善するため、2009年度に開設されるイングリッシュラウンジでは、「授業カリキュラムと連携させたイングリッシュラウンジ活動」をスローガンとして掲げ、自律学習の促進を目指すこととした。2008年度には、準備段階として一部のプログラムの有効性を試すための試験的運用を行った。本稿では、この2008年度に試験運用されたイングリッシュラウンジのプログラムの有効性について、学生の利用状況およびアンケート調査の結果を分析し、2009年度からの本格的な実施に向けての提言をまとめることを目的とした。将来的には、標準的な英語運用能力試験を用いた英語運用能力の向上や、自律学習に対する意識および態度の変化についての実証的なデータを収集し、イングリッシュラウンジ活動の有効性について検証していく必要があるが、本研究においては、次の理由から、その議論には踏み込まないこととする。1) 統制群となり得るイングリッシュラウンジ活動を経験していない上級生と、実験群である1年次からイングリッシュラウンジ活動を経験した学生の間で、カリキュラム改変があり比較対象とすべき2つのグループの学習環境が大きく異なる。2) カリキュラムの改変に伴い、プレースメント試験として用いる試験も変わっているため、共通の指標でのデータが比較できない。3) 2008年度に実施したプログラムは一部であり、自律学習を促進させるためには不十分な実施であった。

2. イングリッシュラウンジ・プログラム (試験運用)

2008年度のイングリッシュラウンジ活動は、開室時間が週3日の昼休みのみに限定された中での実施であったため、2009年度に実施予定であるもののうち、特にランチタイムプログラムと自主学習教材の提供に絞って試験運用し、それぞれのプログラムの有効性および問題点を学生の利用状況を基に分析した。試験運用したプログラムは、表1の通りである。

春学期(4月—7月)は、プレゼンテーションを実施し、学生のプレゼンテーションと教員のプレゼンテーションへの参加率と満足度の違いをみた。また、授業と関連づけたプレゼンテーションと参加が任意であったプレゼンテーションへの参加においても、参加率や満足度に違いがあるかをみた。秋学期(10月—1月)には授業と関連づけた形での学生によるプレゼンテーションを継続しながら、新しいプログラムとして、「アメリカの社会」に関するミニレクチャーと、身近なテーマを持ち寄って行うフリーディスカッションの2つのプログラムを試験運用した。いずれのプログラムについても授業との直接的な関連は持たさず、学生の意志で任意に参加するプログラムであった。春学期のプログラムへの参加を通して、イングリッシュラウンジプログラムの有効性を感じた学生達が、任意参加のプログラムにどれだけ継続的に参加す

るのか、また、より能動的な参加態度が求められるフリーディスカッションと受け身で受講できるレクチャースタイルのプログラムで、参加率が変わるかについても調査した。

表1：2008年度に試験運用したイングリッシュラウンジ活動

プログラム	内容	学期	発表者／講師	授業との 関連
1.授業成果プレゼンテーション	学生が授業で学んだことや調べたことを発表し、質疑応答や意見交換をする。	春学期	英語教育学科 1・2年生	有 (成果発表)
		秋学期	英語教育学科 2年生	有 (成果発表)
2.留学体験プレゼンテーション	海外からの留学生および海外留学を経験した日本人学生が留学生活について発表し、質疑応答や意見交換をする。	春学期	海外からの留学生と交換留学を経験した日本人留学生（タイ、ベトナム、フィリピン、モンゴル、中国）	無
3.教員プレゼンテーション	教員が、自分の経験や研究に基づき「英語学習法」、「自律」、「海外体験」等のテーマで発表し、質疑応答する。	春学期	専任および非常勤英語講師（日本人、外国人を含む）	無
4.ミニレクチャー (アメリカの社会について)	アメリカの社会について、政治、民族、教育などについてのテーマで資料を読みながら勉強する。	秋学期	フルブライト招聘講師（アメリカ人）	無
5.フリーディスカッション	特にテーマを決めず、それぞれが持ち寄ったトピックで自由に話をする。	秋学期		無
6.自主学習教材の提供	文法、リスニング、リーディング、ライティング、語彙、TOEFL®/TOEIC®関連の教材を自由に利用できる。	春学期 秋学期		無

3. 結果分析

3. 1 利用者数と満足度

図1に月毎のランチタイムプログラム参加者数の推移とその内訳、図2に参加者の満足度、および表2に各プログラムの参加者数を示す。

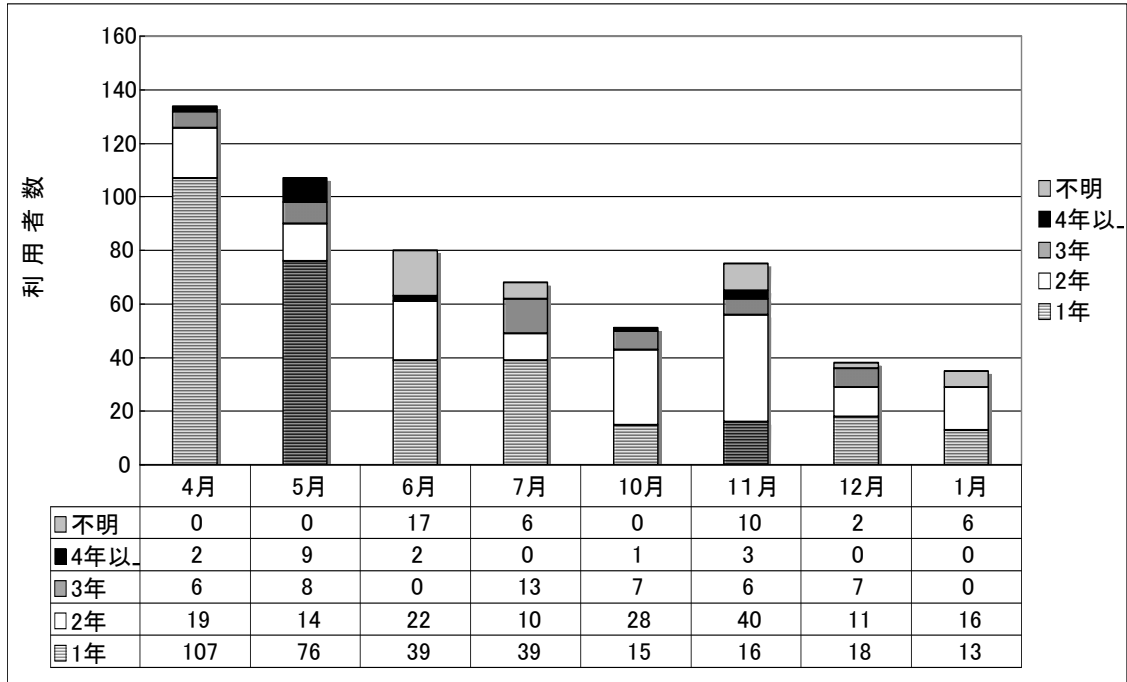


図1：月ごとのランチタイムプログラムの参加者数の推移とその内訳

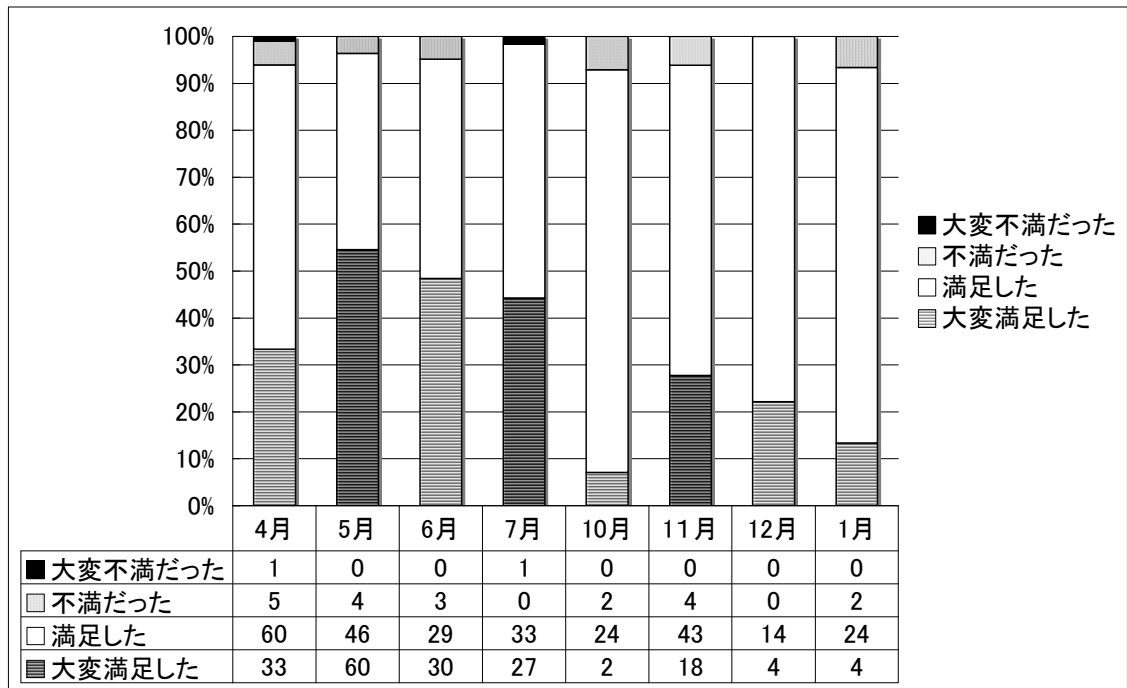


図2：利用者の満足度¹⁾

表2：各プログラムの参加者数

プログラム	述べ参加数(人)	実施回数(回)	のべ参加者数/実施回数(人)
学生によるプレゼンテーション	361	25	14.4
留学生／留学経験者によるプレゼンテーション	164	11	14.9
教員によるプレゼンテーション	149	12	12.4
ミニレクチャー	44	10	4.4
フリーディスカッション	13	10	1.3
自主教材利用	10		

上記のデータを以下の点について比較，考察し，今後の課題についてまとめていく。

- 1) 授業連携型のプログラムと任意参加のプログラム
- 2) 主体的，能動的参加態度が求められるプログラムと受動的に受けられるプログラム

3. 2 授業連携型のプログラムと任意参加のプログラム

表2のプログラムの内，授業連携型のプログラムは「学生によるプレゼンテーション」のみである。授業と連携することで学生の参加は増えるが，授業と連携していない任意参加のプログラムであっても，「留学生／留学経験者によるプレゼンテーション」，「教員によるプレゼンテーション」への参加率は，授業連携のプログラムの場合と変わらなかった。これは，学生が興味を持っているプログラムであれば自主的に参加しようとする能動的態度の現れである。関西国際大学教育学部英語教育学科では，学生主導型の授業スタイルを取り入れ，グループでの調査，発表は日常の授業で繰り返し実施される授業活動であるため，学生の関心も高く，授業に直接連動しないプレゼンテーションであっても，プレゼンテーションに対する意識付けができており，参加率は高かった。また，自らがプレゼンテーションをする機会を持つことで，他の学生や教員のプレゼンテーションにも関心を示すようになったためであるとも考えられる。イングリッシュラウンジでのプログラムを授業と連動した形で実施することは，その他の任意プログラムへの参加意欲を高めるのに一定の効果があるといえそうである。

「プレゼンテーション」のプログラムに比べて，秋学期に実施した「フリーディスカッション」や「ミニレクチャー」への参加率は極端に少なかった。英語教育学科の1，2年次のカリキュラムでは，レクチャー形式の授業は多くなく，学生の関心を引くことが出来なかったこと，難しそうだという印象を与えてしまったことが原因かもしれない。またディスカッションについては，日常の授業でも実施している活動であるが，次の節で述べる「能動的参加態度」が求められるプログラムであったことが，参加率が低かった理由の1つであるのではないかと考える。

参加者の満足度についてみてみると，「プレゼンテーション」と「フリーディスカッション」，「ミニレクチャー」では参加率は違うものの，参加した学生の満足度はどのプログラムでも高かった。より高いレベルで，かつ授業に関連しないプログラムに参加する為には，「自律学習」

への高い意欲，十分な学習への動機付けが必要である。そのハードルを乗り越え参加した学生は若干名であったが，プログラムに参加してその有益性を感じることができた。このような正の経験が積み重ねられていくことで，学習者は自律学習者として育っていくのである。本研究では，授業連携のプログラムに参加したことが，イングリッシュラウンジプログラムの有効性の理解につながり，その理解が任意のプログラムにも参加を促したことを立証するデータを示すことはできなかったが，授業で強制し参加させたプログラムの満足度が高ければ，その他の発展的または任意のプログラムへの参加を促進することができる可能性は示唆されたといえる。

自律学習支援を考える際には，「強制参加」はタブー視される傾向がある。当然，「自律学習」は，本人の学習意欲に基づく「自由参加」であるべきであるが，自主学習習慣も身につけていないような学生にとっては，まず最初のステップとして「強制参加」させることで，プログラムの有効性を理解させ，有機的に「自律学習」への芽生えにつなげていく仕組みを考えていくことも重要である。

3. 3 主体的，能動的参加態度が求められるプログラムと受動的に受けられるプログラム

前節でも触れたように，表3をみると，「プレゼンテーション」以外のプログラムへの参加度は高かったとはいえない結果であった。「ミニレクチャー」の場合は，そのタイトルと内容がよりアカデミックであり難しそうな印象を与えてしまったため，自分の学力に自信のない学生，または自主学習への意欲が，より高いレベルのプログラムに挑戦してみるところまで高まっていなかった学生からは，興味はあったが結局参加しなかったという声が聞かれた。自分の出来ることから始めて，徐々に力を付けながら，より難易度の高いプログラムに参加できるように，段階を追ったプログラムを提供していくことが必要である。プログラムの難易度を明示し，段階的に更に高レベルのプログラムへと学習者を誘導していく等の工夫が必要であると考えられる。

「フリーディスカッション」については，参加が伸びなかったのは難易度の問題ではないようである。参加率だけをみると「ミニレクチャー」よりも低かった。この原因は，能動的参加と受動的参加という視点で，考察できそうである。「プレゼンテーション」および「ミニレクチャー」はプレゼンテーションの発表者でなければ，聴衆として参加することができるプログラムである。意見を求められることはあるかもしれないが，自ら率先して話を組み立てる必要はない。この意味では，自律性が低くても，比較的簡単に参加しやすいプログラムであったし，ある程度の自律性が必要である発表者となる部分については，授業と連動し発表を義務化していたため，参加するかどうかを決める心的な負担は少なかった。しかしながら「フリーディスカッション」に参加する場合は，参加するかどうかを決める際の，内面の葛藤が大きかったのではないかと考えられる。参加するためには，自ら話したいトピックや他の参加者への質問などを考えて準備してくる必要があり，一定の「自律性」が求められた。また，英語運用能力が

十分でない学生にとっては、参加したい意欲はあっても、自信が伴わず参加できないということもあったようである。実際、最初の数回だけ参加し、その後続けられなかったケースが多かった。

自律学習支援の最終目標は、自律学習への意識を高め、学生達がより主体的、能動的に学習に取り組み成果を上げられるよう支援していくことである。しかしながら、「主体的」、「能動的」というのは、あくまでも学習者の内面にある意識であり、自律学習の意欲が、第三者が観察できるような行動となって現れるまでは、客観的なデータとして測定することは大変難しい。本研究における「フリーディスカッション」プログラムへの参加についても言えることであるが、最終的に「参加する」という行動につながらなければ、自律学習支援は失敗したことになるのだろうか。そもそも、人がより難しいことや努力を要することに挑戦するというプロセスは、その挑戦が自分にとって有益であり、また自分には挑戦できる力があるという自信が、一定の閾値を超え「挑戦する」という決断につながり、行動に移すというものである。この間には「行動に移す」ための閾値に達しないため、外部から観察できうる行動となって顕在化していないが、内面で意識の高まりは起きている段階がある。この意欲の高まりを刺激し続けることで、最終的に行動に移すことができるようにすることも、自律学習支援の目的である。本プログラムへの参加者は1、2年次の学生が中心であったが、高年次でより高い自律性が求められるようなプログラムへの参加につなげていくためには、1年次から継続的に様々なプログラムに参加させ、学習意欲を高め、自信を付けせるのが効果的であることが本研究によって示唆された。図1の参加者数の推移を見ると、1年生は秋学期には授業と連携した形でのプログラムを実施していないにもかかわらず、一部の学生は秋学期の任意プログラムにも継続的に参加している。入学直から一部は強制的にはあるがイングリッシュラウンジプログラムに参加したことが、このような数となって現れていると言えるのではないだろうか。

3. 4 年度末アンケート結果

表3に、年度末2月に1年間のイングリッシュラウンジプログラムへの参加について、主な参加者であった教育学部英語教育学科1年生、2年生に行った、アンケート調査結果を示す。アンケートの回答率は1年生が88.2%、2年生が75%であった。

1) 参加度

全体的に2年生の方が1年生よりも参加度が高い結果となっているが、2年生は春・秋学期を通じて授業関連プログラムを実施したためであると考えられる。秋学期には授業と連動したプログラムを実施しなかった1年生でも全体の23%が毎週参加した。前述の通り、授業と連動したプログラムから任意参加のプログラムへの段階的につなげていくことが必要である。

表3：学期末アンケート調査結果（上段：回答数，下段：回答者にしめる割合）

1. どのくらいの頻度で英語ラウンジを利用しましたか。

	0回	学期に1回程度	月1回程度	週1回程度	週数回
1年生	0 0%	7 23%	16 53%	3 10%	4 13%
2年生	0 0%	1 4%	10 42%	10 42%	3 13%

2. 利用した目的は何でしたか。

	学生のプレゼンテーション	教員のプレゼンテーション	ミニレクチャー	自主学習	宿題支援	英会話	授業活動として
1年生	25 83%	15 50%	10 33%	2 7%	4 13%	6 20%	6 20%
2年生	23 96%	2 8%	0 0%	1 4%	1 4%	1 4%	3 13%

3. プログラムに参加して満足しましたか。

	大変満足した	満足した	少し満足した	全く満足しなかった
1年生	9 30%	10 33%	7 23%	2 7%
2年生	5 21%	12 50%	5 21%	2 8%

4. イングリッシュラウンジリーダーになりたいですか。

	はい	いいえ
1年生	9 30%	21 70%
2年生	5 21%	19 79%

5. 来年度どのようなプログラムを開いて欲しいですか。

	学生のプレゼンテーション	教員のプレゼンテーション	ミニレクチャー	自主学習	宿題支援	英会話	授業関連の活動	先輩—後輩の学習グループ	文法学習支援
1年生	20 67%	18 60%	15 50%	12 40%	17 57%	17 57%	9 30%	5 17%	11 37%
2年生	16 67%	9 38%	4 17%	9 38%	6 25%	9 38%	2 8%	2 8%	8 33%

2) 参加目的

関西国際大学でのイングリッシュラウンジ活動は2008年度に初めて試験運用したものであり、1年生も2年生も初めて参加するプログラムであった。しかしながら、1年生と2年生を比較すると、違いが見られた。2年生は主に授業活動として「学生のプレゼンテーション」に参加した学生がほとんどであったのに対し、1年生はより多くの任意参加のプログラムに参加している。このことから、このような自律学習支援プログラムは入学直後から段階的かつ継続的にあたえていくことで、学習者も自分の学習の中に取り入れていくことができるようになることが示唆される。効果的な学習計画を立てさせる初年次教育が重要である。

3) 満足度

先に示した図2のプログラム参加直後の満足度と同様の結果であり、今後この満足度を「自律学習」への意識の向上につなげていく工夫をしていく必要がある。その効果を実証するためのアンケート調査および、TOEIC®/TOEFL®等の英語運用能力測定試験結果等のデータの時系的変改をみていく必要がある。

4) イングリッシュラウンジリーダー

本研究ではランチタイムプログラムの有効性について着目したが、プログラムの実施においては、関西国大大学の卒業生で、現在英語教育を学んでいる大学院生にイングリッシュラウンジリーダーとして参加してもらった。プレゼンテーションや英語学習相談などを担当し、学生と交流しながら学生達に自律学習の大切さを教える役割を果たした。このリーダーの効果は数量的なデータで図ることは難しいが、次年度自分もイングリッシュラウンジリーダーとなって新入生のサポートをしたいと考える学生が、1年生の30%、2年生の25%いたことは、イングリッシュラウンジリーダーが有効に機能したことを示しているといえる。

5) 希望するプログラム

学生が求めているものは授業と連動したプログラムに加えて、自主学習支援や英会話、ミニレクチャー等、様々である。本年度は試験運用であり、一部のプログラムしか実施できなかったが、「自律学習」を促進するためには、学生主導型の協働学習グループや学習技術の向上を支援するプログラムなどを充実していく必要がある。

4. まとめと今後の課題

本研究では、「自律学習を促進する」イングリッシュラウンジ活動を成功させるために、どのような取り組みが必要であるかについて、関西国際大学の試験運用の実例を基に、授業との連動、段階的プログラムの提供、継続的な動機付けの必要性などについて考察した。大学生の学習意欲、学習習慣、学力の低下が問題視される中、学生を自律学習者へと導き、大学での学びを充実させることができるように指導、支援していくことは不可欠であり、大学が取り組むべき最重要課題の1つでもある。今後も継続的に研究を重ねていく必要がある。

注

1) この満足度は各プログラム終了直後にアンケート調査として実施したものを累積したデータである。

参考文献

- Agota Scharle and Anita Szabo (2000) *Learner Autonomy*. Cambridge University Press
青木直子 (1996) "Autonomous Learning: What, why and how?", *ASTE Newsletter*, no. 35.
Krashen, Stephen D. (1988) *Second Language Acquisition and Second Language Learning*.
Prentice-Hall
三矢真由美 (2000) 「能動的な教室活動は学習意欲を高めるか」『日本語教育』103号, 1-10
中田賀之 (1999) 『言語学習モチベーション-理論と実践-』リーベル出版
Phil Benson and Peter Voller (1997) *Autonomy and Independence in Language Learning*.
Pearson Education

Zoltan Dornyei (2001) Teaching and Researching Motivation. Pearson Education

ゾルダン・ドルニェイ (2005) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』 米山朝二他
訳 大修館書店

Abstract

In EFL circumstances, it is crucial for English learners to try to enhance the chances to study or use English outside of their classes if they want to be a successful English learner. This requires students' autonomous attitude to study. Many schools provide such learning opportunities outside classes such as Language Lounge activities and English learning clubs. Most of the students who get benefits out of these opportunities are those who have already motivated or have some autonomous learning skills. However, under the globalization of the university education, where even students who have inadequate study skills are matriculated at a university, just opening those opportunities to students sometimes isn't effective. Especially those students need some help to develop their study skills to be an autonomous learner and be able to utilize the facilities and opportunities to improve their English. This paper reported the results of a preparatory experiment of some activities at Kansai University of International Studies to develop their English Lounge activities to foster autonomous language learning.